

主 題：永遠の『わたしはある』

聖書箇所：ヨハネの福音書 8章48－59節

この朝、続けて見たいみことばはヨハネ8：48－59です。ヨハネの福音書8章を時間をかけて見ましたけれども、きょうがクライマックス、最後になります。タイトルにもあるように、永遠の『わたしはある』である方、偉大なイエス様について考えたいと思います。それぞれよく神様からのことばに耳を傾けてください

### ヨハネ8：48－59

「:48 ユダヤ人たちは答えて、イエスに言った。「私たちが、あなたはサマリヤ人で、悪霊につかれていると言うのは当然ではありませんか。」:49 イエスは答えられた。「わたしは悪霊につかれてはいません。わたしは父を敬っています。しかしあなたがたは、わたしを卑しめています。」:50 しかし、わたしはわたしの栄誉を求めません。それを求めになり、さばきをなさる方がおられます。」:51 まことに、まことに、あなたがたに告げます。だれでもわたしのことばを守るならば、その人は決して死を見ることはありません。」:52 ユダヤ人たちはイエスに言った。「あなたが悪霊につかれていることが、今こそわかりました。アブラハムは死に、預言者たちも死にました。しかし、あなたは、『だれでもわたしのことばを守るならば、その人は決して死を味わうことがない』と言うのです。」:53 あなたは、私たちの父アブラハムよりも偉大なのですか。そのアブラハムは死んだのです。預言者たちもまた死にました。あなたは、自分自身をだれだと言うのですか。」:54 イエスは答えられた。「わたしがもし自分自身に栄光を帰するなら、わたしの栄光はむなしいものです。わたしに栄光を与える方は、わたしの父です。この方のことを、あなたがたは『私たちの神である』と言っています。」:55 けれどもあなたがたはこの方を知ってはいません。しかし、わたしは知っています。もしわたしがこの方を知らないと言うなら、わたしはあなたがたと同様に偽り者となるでしょう。しかし、わたしはこの方を知っており、そのみことばを守っています。」:56 あなたがたの父アブラハムは、わたしの日を見ることを思っ大いに喜びました。彼はそれを見て、喜んだのです。」:57 そこで、ユダヤ人たちはイエスに向かって言った。「あなたはまだ五十歳になっていないのにアブラハムを見たのですか。」:58 イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。アブラハムが生まれる前から、わたしはいるのです。」:59 すると彼らは石を取ってイエスに投げつけようとした。しかし、イエスは身を隠して、宮から出て行かれた。」

### ●あまつ御使いよ（讚美歌162番『キリスト教世界の国家』エドワード・ペロネット）

皆さんもよく知っている賛美だと思えます。私も大好きな賛美歌の一つ賛美歌162番“あまつ御使いよ”は、今も世界中で歌われ、多くの信仰者の間で親しまれてきました。あまりピンとこないという人も一番の歌詞を見れば思い出すかもしれません。「あまつ御使いよ イエスの御名の力をあおぎて 主とあがめよ 力をあおぎて 主とあがめよ」と。この曲はその人気さのゆえに、今日ではキリスト教世界の国家とまで一部で言われています。そしてそんな有名な曲を記したのがエドワード・ペロネットという人物でした。1726年イングランドの牧師家庭に生まれた彼は、幼い頃からイエス様を愛して、イエス様に身をささげました。後に牧師となって仕えた彼は、いろいろな場面であってひどい迫害に遭い、時にいのちの危険にさらされることもありました。彼の味わった困難について、一つの伝記の中に次のように書かれています。「ロックデールからボルトンへ向かいました。そしてすぐに、ロックデールで私たちを襲った獅子たちも、ボルトンの者と比べれば子羊のようなものだったと分かりました。エドワード・ペロネットは地面に投げ倒され、泥とぬかれみの中を引きずり回されました。石が投げつけられ、窓ガラスも割られました。」と。ペロネットは主のために苦しんだ人でした。しかしたとえ何があったとしても、

彼は主を見上げ、主のために忠実に仕えました。イエス様の偉大さというものを知っていたからこそ、彼はこの方だけをあがめて、すべての主として賛美しようとした。そしてそんな彼の強い思いは確かに曲の中にもはっきりと現れていたのです。先ほど私たち1番を見ましたけれども、“あまつ御使いよ”の原曲、英語の歌詞の繰り返し部分には、1番から最後までこんなことばがつづられていました。「冠をささげて すべての主と崇めよう 冠をささげて すべての主と崇めよう」と。これこそがまさにイエス様の偉大さを知っていた者の最も自然な応答でした。王の王である主の前にひれ伏して、心から礼拝をささげるといふこと、それがすべての人にとって本来一番ふさわしい態度でした。

しかし残念ながら、今も昔もすべての人がそのような態度を取るわけではありません。実際今、いっしょに学び続けているヨハネ8章の中でも多くの者たちがイエス様を目の前にしながら、イエス様のことを拒みました。改めてこれまでに見てきた流れを思い返してみてください。イエス様はユダヤ人の三大祭りの一つ、仮庵の祭りに現れ、そこでご自分が世の光なのだと大胆に宣言されました。イエス様は罪の奴隷になっていた民たちが抱えている問題を初めから知っていたからこそ、繰り返し繰り返し救いの御手を差し出そうとしました。イエス様は8：12で人々に向かって言うのです。「イエスはまた彼らに語って言われた。「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」と。また繰り返し24節ではイエス様はこんなふうに言いました。「それでわたしは、あなたがたが自分の罪の中で死ぬと、あなたがたに言ったのです。もしあなたがたが、わたしのことを信じなければ、あなたがたは自分の罪の中で死ぬのです。」と。また36節でもイエス様はこう言っていました。「ですから、もし子（イエス様のことですが）があなたがたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです。」と。イエス様はここで非常に厳しいことばを何度も何度も群衆に投げかけました。私たちの耳にも時にきつく厳しく聞こえるようなことばでした。でも私たちが見てきたように、その根底にはいつも罪人の永遠を思いやる救い主の深い愛が存在していたのです。イエス様は愛を示されていたお方でした。ただ悲しいことに、そんな救い主の愛に対して人々はどう応答したか——。最初は多くの人々は「イエス様を信じる」と口にはしました。でも次第に、心のうちで憎しみや殺意を募らせた彼らは、この章の最後にはイエス様に対して率先して石を投げようとした。石打ちにして殺害しようとしたのです。彼らは王様にふさわしい冠ではなく、石を投げつけました。

## ○永遠の『わたしはある』：イエス様に見られる四つの偉大さ

きょう、これからいっしょにみことばを学んでいくに当たって、改めて考えてほしい質問があります。果たして皆さん自身は今、イエス様の前に喜んで冠をささげ続ける者として生きているのでしょうか。それとも石を取ってこの王様を拒絶する者として生き続けているのでしょうか。ここにいるひとりひとり、二つの生き方しかありません。どちらを歩んでいるでしょう。今回の箇所からは特に『わたしはある』である方、イエス様の四つの偉大さというものを見て取ることができます。それを順番に見ながら、改めてどんなにイエス様が偉大なのか、そしてそのイエス様の前をどのようにして歩むべきなのか、自分のこととして考えてみましょう。

### 1. 侮辱の中でもへりくだられたイエス様 48－50節

一つ目は、侮辱の中でもへりくだられたということです。イエス様は人々から卑しめられる中であって、なお自らご自分を低くされたお方でした。48節、このように始まっています。「ユダヤ人たちは答えて、イエスに言った。「私たちが、あなたはサマリヤ人で、悪霊につかれていると言うのは当然ではありませんか。」と。これを読んだだけでも読み取れたかと思えます。この時、ユダヤ人たちの心のうちにはイエス様に対する不平不満、憎しみ、憤りというものがあふれていました。特に彼らはここでイエス様を表現するのに二つのことばを用いていました。「サマリヤ人」、そして「悪霊につかれている」とイエス様に向かって言ったのです。なぜこの二つだったのでしょうか。これらのことばは何を意味していたのでしょうか。

#### ▶「サマリヤ人」

一つ目の「サマリヤ人」というのは、彼らの抱いていた大きな敵意を表すものでした。この当時ユダヤ人とサマリヤ人との間にはあまりにも深い溝が存在し続けていました。純血のユダヤ人は、いろいろな外国の血や宗教に混ざり合ったサマリヤ人のことをひどく汚れている異端者として、常に軽蔑していました。以前にもいっしょに見たサマリヤの女性の話の中でも、その関係がヨハネ4：9にこんなふうに描かれていました。「そこで、そのサマリヤの女は言った。「あなたはユダヤ人なのに、どうしてサマリヤの女の私に、飲み水をお求めになるのですか。」——ユダヤ人はサマリヤ人とつきあいをしなかったからである——」と書いていました。ユダヤ人はサマリヤ人と付き合いをしていませんでした。ですからユダヤ人にとって「サマリヤ人」と口にするのは、最大限の憎しみ、敵意の表れだったのです。

#### ▶「悪例につかわれている」

またもう一つの「悪霊につかわれている」というのは、彼らの抱いていた大きな軽蔑を表すものでもありました。ご存じの方もいるかもしれませんが、当時の人々の間では、悪霊が人々を病気にしたり、気を狂わせるといった考え方が実際に広まっていた。自分たちには全く理解できないような正気でない、いかれたような人をさげすむ意味合いで、この表現は用いられていたのです。たとえばほかの箇所ではヨハネに対しても、こんなふうに言われていました。マタイ11：18に「……ヨハネが来て、食べも飲みもしないと、人々は『あれは悪霊につかわれているのだ』と言い、」とあります。ですからユダヤ人にとって「悪霊につかわれている」と口にするのは、最大限の拒絶、最大限の軽蔑の表れでした。

さて、イエス様はここまで救い主として罪人にあわれみの御手を何度も何度も示されていました。自分たちは救われていると思いついていようような人たちに対して、実際は滅びへと向かっているのだと警告することで、本当の救い、永遠のいのちを与えようとされました。この世にやって来られた神の子がなしていたことは、すべて罪人に対する深い愛とあわれみに基づくものだったのです。しかし、そんなお方に対して人々はただ拒んだだけではありませんでした。彼らは大きな敵意と軽蔑を持って、自らの意思で逆らいました。あわれみに対して感謝するのではなく、この人は気が狂っていると攻撃したのです。だれかのために懸命に尽くし、愛とあわれみをもってすべてのことをなし、喜んでくれるだろうと思っていれば喜ばれないばかりか、逆に不満を持って攻撃される。もし私たちがイエス様の立場に置かれていたとしたら、私たちはもう知りません、自分が喜んで払ったこの犠牲に感謝しないのであれば、もう相手にしませんと思うかもしれません。私たちは拒絶されることに対して、苦い思いや不満を持って答えるかもしれません。

では、イエス様はどのように応答されたのか、続きを見てください。49－50節にこう書かれています。「：49 イエスは答えられた。「わたしは悪霊につかわれてはいません。わたしは父を敬っています。しかしあなたがたは、わたしを卑しめています。：50 しかし、わたしはわたしの栄誉を求めません。それをお求めになり、さばきをなさる方がおられます。」と。イエス様がなされたことは、不機嫌になってその場を立ち去ることではありませんでした。自分を不当に扱う者たちに対して怒りを爆発させることでも、彼らのことを自分の手でさばくことでもありませんでした。イエス様がなされたことは、ただ変わらずに自分の父を敬い、そして自分の栄誉を求めたのではなく父の栄誉を求め続けることでした。このような場面においても、イエス様はどんな時でも父なる神様のみこころを求めたのです。この方は人となられたまことの神でした。にもかかわらずご自分が卑しめられてへりくだることを自ら選ばれていたのです。

イエス様はすべてを正しくさばかれる父の御手にゆだねようとしました。それがイエス様の示した模範でした。かつてあのペテロもそんな主の姿を描いています。1ペテロ2章に、ペテロもイエス様のとてつもなくへりくだられた姿をこのように記していました。1ペテロ2：21－24に「：21 あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。：22 キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。：23 ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せ

になりました。:24 そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」と書いています。いろいろなことが言えますが、一つだけ注目してほしいのは、「正しくさばかれる方にお任せになりました」というこのことばです。これを読むと、あたかもイエス様がたった一回だけ自分の身を父にゆだねてしまったかのようにも聞こえます。でも実はここに使われていた動詞の時制は、過去における継続というものを表すものでした。文法用語は置いておいたとしても、イエス様はここで何度も何度も正しくさばかれる方に自分の身を任せようとしていたことが言われていたのです。イエス様はたった一度だけ正しくさばかれる方にお任せになっていたわけではありません。何度も何度も正しくさばかれる方に自分の身をゆだねようと歩んでいたのです。イエス様は悪口を浴びせられ、ののしられるたびに、父の助けを求めました。値しない苦しみを受けるたびに父の御手にすべてをゆだねようとしました。そしてこの態度は最後の最後まで続いたのです。十字架での最後のことばが何だったか覚えていますか？イエス様は大声で叫ばれていました。「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」(ルカ 23 : 46) と。これが私たちの愛する偉大なイエス様の残した模範でした。神の御子は侮辱を受けるその中であっても、自らへりくだって、絶えず御父の手にすべてをゆだねようとしました。本来であれば冠だけを受けるべきお方であるのに、自ら恥や痛みを受けられていたのです。そしてこのすべてが、罪人である私たちに救いをもたらすためであったということを知るのであれば、私たちにふさわしい応答は、この方をただ礼拝することだけでした。

## 2. 敵に対して愛を示されたイエス様 51-52節

これだけではありません。この方はただ侮辱の中で父にゆだねてへりくだっていただけでなく、さらにすごいことをなされました。それが二つ目の偉大さです。それは敵に対して愛を示されたということです。イエス様は自分に敵意と軽蔑をあらわにする者にさえ救いの約束を与えようとされたお方でした。続く 8 : 51 でイエス様はこんなことばを口にしました。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。だれでもわたしのことばを守るならば、その人は決して死を見ることはありません。」と。驚くべきことに、イエス様は自分自身のいのちを奪おうと殺意を持っている者に対して、いのちを与えようとされました。

今読んだことばを理解する上で、押さえてほしいポイントが二つあります。1つ目のポイントは、ここで「だれでもわたしのことばを守るならば、その人は決して死を見ることがない」と言われていました。これを勘違いしてはいけません。これは人々が主のことばを必死に守るのであれば、その報いとしてのいのちが与えられるという約束をしているわけではありません。イエス様がここで突然、従い続けていくというその人の行いが主の好意を勝ち取ることに繋がると教えたわけではありません。イエス様が教えていたことは最初からずっと一貫していました。救いをもたらす本物の信仰には単なる告白だけではなく、主のことばを守る、その従順が必ず伴うということです。イエス様が言わんとしたことは、イエス様を信じて新しく造り変えられた者であればだれでも、イエス様のことを愛しているからこそ、どんな時もこの方に仕えて、どんな時もこの方に従い、この方のことばのうちにとどまり続けようとするということでした。真に救われた本当の弟子は、主のことばにとどまり続ける生き方を通して、その救いが本物であることを明らかにするのです。だれでも私のことばを守るなら、だれでも私のことを愛して救われた者として従い続け、守り続けていくのであれば、そんな本当の弟子にはすばらしい約束があるのだと言われたのです。

二つ目のポイントは、「その人は決して死を見ることはありません」と言われていました。これが救われている者に与えられる約束でした。でもこれはどういう意味だと思いませんか？これは何を言わんとしているのでしょうか。イエス様のことばを守り続ける信仰者は、肉体的な死を経験することがないと言っているのでしょうか。もちろんそうではありません。私たちがよく知っているとおり、この世に生まれてくるすべての人は必ず地上での最後の日を迎えます。年齢が若かろうが、年齢を重ねていようが、ここにいるど

んな人であろうとも、いつの日か肉体の死は訪れます。みことばもそのことをはっきりと言っていました。ヘブル9：27にも「そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっているように」と、一度死ぬことは定まっていることでした。では「死を見ること」がないとはどういうことでしょうか。イエス様はここで中身の無い約束を口にしていたのでしょうか。いいえ、そうではありません。ここで言われていたことは、霊的な死の話、永遠の死の話でした。イエス様を信じて救われた者たちは、たとえ地上での死を迎えたとしても、それですべて終わりではありません。それで神様との交わりが絶たれるわけではありません。罪がもたらすさばきから助け出された救われた者は、神様から永遠に引き離されることなく、いつも神様とともにいて、いつも愛する神様を知り続ける者として、今もまたこの先もずっと歩むことができるのだと、そんな約束が与えられていたのです。

それがイエス様のもたらしてくれる永遠のいのちというものでした。これと同じ約束をイエス様はこの福音書の中でももうすでに何度も口にしていました。ヨハネ5：24でもこう言われていました。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」と。また同じ6：47-48にこう書いていました。「：47 まことに、まことに、あなたがたに告げます。信じる者は永遠のいのちを持ちます。：48 わたしはいのちのパンです。」と。また51節にも「わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きています。またわたしが与えようとするパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。」と。ヨハネの福音書は同じことが言われ続けていました。

また、このヨハネの書全体が書かれた目的は、ヨハネ20：31に、「……イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである。」とあります。ヨハネの福音書は最初から最後まで同じことをずっと言われ続けていました。いのちを与えるためであると。改めて考えてください。イエス様は何をしにこの世に来たのでしょうか。救い主として来られたイエス様は、罪の中に死んでいた罪人にいのちをもたらすために来られました。生まれながらにみな罪人は罪の中で死んでいました。人はみな罪の中で死ねば、その罪の結果として、神様から永遠に引き離され、地獄で苦しみ続ける定めがありました。それこそがすべての罪人に対して、神様に逆らい続ける者に対してふさわしい、正しいさばきでした。しかし、救い主として来られたイエス様は、あの十字架にあって、本来なら私たちが受けるべき罪の罰を、さばきを代わりに受けて、神様の御怒りを代わりに受けて、父なる神様との断絶を経験し、本来私たちが味わうべきだったその死を味わわれました。いのちだけがふさわしいお方が代わりに死を味わわれたから、死だけにふさわしい者がいのちを得ることができるようになったのです。

ヘブル2：9にもこんなふうには書いていました。「ただ、御使いよりも、しばらくの間、低くされた方であるイエスのことは見ています。イエスは、死の苦しみのゆえに、栄光と誉れの冠をお受けになりました。その死は、神の恵みによって、すべての人のために味わわれたものです。」と。少し自分自身に問いかけてみてください。皆さんは今自分の死に対して恐れを持っているのでしょうか、不安を抱えているのでしょうか。もし恐れを持っているのであれば、感謝な知らせがあります。イエス様を信じる者は死を恐れる必要がもうなくなったということです。この地上で迎える死は主と直接出会うその瞬間になります。今はまだ見たこともないけれども、心から愛しているその救い主と初めて顔と顔を合わすことができる死というのは、私たちが待ち望むことができる日になりました。また同時に、その日は愛する家族や友と再会できる日でもあります。信仰を持って先に眠っていった者たちのことを思う時、私たちは寂しさを覚えることはありません。それでも私たちはもう二度と会えないと、そんな希望のない者のように悲しみに暮れる必要はなくなりました。恵みによってイエス様を信じて救われて、死からいのちへと移された者にとって、死はもはや損失ではなく益と呼ぶことができるようになりました。死というのは失うものではありません。死の瞬間、イエス様に会うことができるという私たちにとって何にも変えがたいものを手にすることがで

きる日になるのです。チャールズ・スポルジョンもこう言います。「クリスチャンの人生で最も素晴らしい瞬間は、その最後の瞬間です。なぜなら、それが天に最も近づく時だからです。」と。罪の中に死んでいた時はこんな希望などありませんでした。でもイエス様が成し遂げてくださったそのみわざによって救われた者たちは、最高の希望を持って生きていくことができるようになりました。イエス様は私たちに最高の希望をもたらしてくれた勝利者でした。

そしてイエス様はそんなすばらしい希望を、自分を殺そうとする敵にさえ与えようとしたということです。残念ながら、その話を聞いていた者たちはそのすばらしさに気づくことはありませんでした。続く52-53節にもイエス様の話を聞いていた者たちの応答がこう書いています。「:52 ユダヤ人たちはイエスに言った。「あなたが悪霊につかれていることが、今こそわかりました。アブラハムは死に、預言者たちも死にました。しかし、あなたは、『だれでもわたしのことばを守るならば、その人は決して死を味わうことがない』と言うのです。:53 あなたは、私たちの父アブラハムよりも偉大なのですか。そのアブラハムは死んだのです。預言者たちもまた死にました。あなたは、自分自身をだれだと言うのですか。」」と。イエス様は変わらずにどんな相手に対しても救いの手を差し伸べようとしていました。でも彼らは自らの意思をもって、それを拒み続けました。あなたはいったい何様ですかと、イエス様のことを軽蔑しました。イエス様が肉体の話をしていると決めつけて、あろうことかあわれみ深い救い主に対して、やっぱりあなたは悪霊につかれていますとさげすみました。でもイエス様は、彼らがこれほどまでにかたくなな者だと知っていながらも、それでも救いを与えようとしたのです。文字どおりこの方の愛というものには分け隔てがありませんでした。どれほど愛するのが困難な相手であったとしても、自ら進んで愛を示そうとしたお方、それが偉大なイエス様だったのです。それが私たちの礼拝に値すべき、また私たちが模範とするべきお方でした。

### 3. アブラハムが喜びを見いだしたイエス様 54-56節

イエス様に見られる偉大さの三つ目は、アブラハムが喜びを見いだしたということです。イエス様はこの時ユダヤ人たちが誇っていたアブラハムまでもが自分のうちに希望を見たのだと言われました。54節にこう書かれています。「:54 イエスは答えられた。「わたしがもし自分自身に栄光を帰するなら、わたしの栄光はむなしいものです。わたしに栄光を与える方は、わたしの父です。この方のことを、あなたがたは『私たちの神である』と言っています。:55 けれどもあなたがたはこの方を知ってはいません。しかし、わたしは知っています。もしわたしがこの方を知らないと言うなら、わたしはあなたがたと同様に偽り者となるでしょう。しかし、わたしはこの方を知っており、そのみことばを守っています。:56 あなたがたの父アブラハムは、わたしの日を見ることを思って大いに喜びました。彼はそれを見て、喜んだのです。」」と。不思議なことが書かれていました。父なる神様から遣わされ、父なる神様のことをご存じだったイエス様は、ここでアブラハムが私の日を見て喜んだのですと口にしました。アブラハムはイエス様がいた時代よりも約2000年前に生きていた人でした。だとしたらいったいそんな人物がイエス様の日を見て喜んだというのは、どういう意味を表しているのでしょうか。この解釈に関しては実はいろいろな考えが挙げられています。ただ少なくとも言えるのは、アブラハムはやって来る救世主、メシヤを与えるという神様の約束を信じて、その約束のうちに喜びを見いだしていたということです。

少し歴史を振り返ってみましょう。神様はアブラハムに、初めにこんな約束を与えました。子どもがいなかった75歳の彼のもとに現れた神様はこう語ります。創世記12:1-3に「:1 【主】はアブラムに仰せられた。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。:2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。:3 あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」」と。神様はアブラハムのことを祝して、彼の子孫を通して地のすべての者を祝福すると約束されました。そのことばを信じた彼は、将来に目を留めながら神様に従ったのです。またその後も、神様は再びアブラハムのもとに現れ、彼に向かって言われました。創世記15:5-

6で「:5 そして、彼を外に連れ出して仰せられた。「さあ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。」さらに仰せられた。「あなたの子孫はこのようになる。」:6 彼は【主】を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」、神様はアブラハムにこう約束されました。アブラハムにはこの時まだひとりの子どもも与えられていませんでした。星のように子孫をふやされるというのは、あまりにも途方もない話にも聞こえました。しかしそれでも彼は神様の約束であるならば果たされると、将来に目を留めながらそのことばを信じました。そしてこの後、彼の元には約束とおりに息子イサクが与えられました。このイサクはメシヤへとつながっていく系譜の最初の人物でした。皆さんがスキップする箇所かもしれませんが、マタイ1:1-2に「:1 アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図。:2 アブラハムにイサクが生まれ、……」と、イエス様の系図が書かれていました。アブラハムは最初から自分の子孫を通して救い主が与えられるという主の約束を信じていました。イサクが与えられ、そして次にヤコブが与えられていくその中であって、その道の先に救世主が来ることを確信していました。もちろん彼自身が実際にその約束の実を見ることはかないませんでした。しかしそれでも彼はそのやって来る将来のことを楽しみにしながら、その日が来るのを大きな喜びを持って見続けていたのです。そしてまさに彼がこうして待ちわび続けていた救世主こそ、アブラハム・ダビデの子孫を通してやって来たイエス・キリストだったのです。

だから改めて考えてみてください。イエス様というのは単なる歴史上の人物ではありません。イエス様というのは単なる救い主でもありません。この方はアダムとエバが罪を犯して以来、人々が待ち望み続けてきた蛇の頭を砕く者でした。この方は、アブラハムだけではなく、モーセやダビデやイザヤやエレミアなどほかの預言者たちも同じように期待し、同じようにその誕生を待ちわび続けていた約束のメシヤでした。この方こそがまさに旧約の歴史が指し示し続けてきた約束の成就なるお方だったのです。それが私たちの礼拝するイエス様でした。私たちが与えられているこの聖書の最初から最後まで指し示し続けているお方は、まさに偉大な救い主であるイエス・キリストでした。このような方の偉大さを覚えるのであれば、私たちにできる応答は一つです。この方の前にただ礼拝をささげることでした。

#### 4. 永遠の神であるイエス様 57-59節

そして最後に、もう一つイエス様に見られる偉大さの四つ目は、永遠の神であるということです。イエス様は始めも終わりもないいつまでも変わらないまことの神様でした。残りのみことばはこのように締めくくられています。57節から「:57 そこで、ユダヤ人たちはイエスに向かって言った。「あなたはまだ五十歳になっていないのにアブラハムを見たのですか。」:58 イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。アブラハムが生まれる前から、わたしはいるのです。」:59 すると彼らは石を取ってイエスに投げつけようとした。しかし、イエスは身を隠して、宮から出て行かれた。」とあります。悲しいことに、ユダヤ人たちは最後の最後までイエス様のことばを素直に受け入れようとはしませんでした。彼ら自身が希望を置いていたアブラハムですら、イエス様を喜んでいたと言われたにもかかわらず、彼らの取った応答はその主を非難することでした。

彼らは57節で、「あなたはまだ五十歳になっていないのにアブラハムを見たのですか。」と言っていました。これを読んでいて、急に50歳という数字が出てきたのを不思議に思った人もいるかもしれません。イエス様はこの時30代でした。ではなぜ急に50歳という数字が出てきたのでしょうか。これは当時のユダヤ人にとってこの年齢が一つの区切りを表すものだったからでした。たとえば50歳というのは、レビ人が託された天幕での働きを引退する年齢でもありました。民数記4:3に「それは会見の天幕で務めにつき、仕事をするのできる三十歳以上五十歳までのすべての者である。」と書かれています。つまりこの50という年齢は、社会の中であって十分に成熟した人の達する年として扱われていたものでした。今で言うなら定年退職するような年齢だったのです。ユダヤ人たちは自分たちの目の前にいるイエス様がそんな年齢に達していないことをよくわかっていました。それがあからさまだったからこそ、あざ笑って

ここで言うのです。あなたはまだ仕事を辞めるほどの年齢にも達していない若者なのに、どうしてあなたがアブラハムを見たと言えるのですか、そんなことが可能なのですか、そんなあなたの話など信じられるはずがないと。罪によって盲目になっていた彼らは、真理に目を向けることができませんでした。真理を受け入れようとしませんでした。彼らの頭では、イエス様が肉体的な年齢の話をしているとしか思えなかったのです。

だからこそイエス様はそんな彼らに大胆に宣言されていました。58節「まことに、まことに、あなたがたに告げます。アブラハムが生まれる前から、わたしはいるのです。」と。細かいことかもしれませんが、イエス様はここで単に「アブラハムが生まれる前から私はいたのです」とは言われませんでした。そうではなく「アブラハムが生まれる前から、わたしはいるのです」と主張しました。言いかえると、この方はいつも変わらずに存在されるお方だということです。アブラハムが地上を歩んでいた時も、アブラハムが生まれる前も、いやそれ以上にこの世界が生まれるその前からイエス様という方は常にある、いるお方でした。この方が存在するようになった瞬間もなければ、存在するのをやめるようになった瞬間もありません。この方こそアルファでありオメガでした。この方は永遠から永遠に至るまでおられる、まことの神様だったのです。

それがここに現れていました。ある人は今でもイエス・キリストが自分自身のことを一度も神と主張したことはないと言っています。ある人たちはこの方はイエス様は素晴らしい教師や預言者のひとりであったとしても、神様ではなかったと信じています。でも今回の箇所を見れば、その考えは真っ向から否定されるのです。イエス様はここで、だれの耳にもわかるように、ご自分こそが神なのだを示されました。「わたしはある」(出エ3:14)と、神様ご自身が最初にモーセに明かされた神の名を自分に用いられたのです。かつてイスラエルの民を指導者として導いたモーセ。ある日、彼はエジプトで奴隷になっていた民を連れ出すようと、燃える柴の中から神様に求められ、自分のような者には到底そんなことはできませんと訴えていました。モーセはその時代に圧倒的な力を持っていたパロや民の目を恐れていたのです。そして恐れを持っていた彼は神様に対して一つの問いをしました。こんなふうに神様に尋ねたのです。「もし自分を遣わせた方のその名がだれなのかと問われたら、その時私は何と答えたらいいでしょうか」と。それに対して神様ははっきりと答えていました。出エジプト3:14で、神様はモーセに言われるのです。「神はモーセに仰せられた。『わたしはある』という者である。」また仰せられた。「あなたはイスラエル人にこう告げなければならない。『わたしはあるという方が、私をあなたがたのところに遣わされた』と。」と。「わたしは、『わたしはある』という者である」、それがモーセを遣わした変わることもなく、ことばでもって世界を造り、圧倒的な力でその世界を支え、聖く正しく永遠に存在し続ける唯一まことの神様でした。その『わたしはある』という名前をイエス様は自分自身に当てはめていたのです。

絶対に勘違いしてはいけないことは、この方は単なる人ではありません。この方は偉大な『わたしはある』でした。そしてそれが明らかなのは、これまで一向にイエス様のことばを理解できなかったユダヤ人たちがさえも、このことばを聞いた瞬間に、イエス様が自分自身を神としていることに気づき、石を取ってイエス様のことばを殺そうとしたのです。彼ら敵でさえもわかっていました。イエス様がご自身を神だと言われていることをです。でも残念ながら彼らの取った応答は間違っていました。彼らは怒りに燃えて、本来であれば冠をささげるべきお方に石を取って打ち殺そうとしたのです。

果たして私たち自身はどうでしょう。このような偉大なお方に対して、どのように応答するでしょう。かたくなだったユダヤ人のように、何度真理を耳にしていたとしても、その真理を受け入れることを拒み、従うことを拒み続けていくのでしょうか。偉大な神様を前にして、自分にはこの方は関係ないと石を投げるのでしょうか。それともこの方の前にへりくだって喜んで礼拝をするのでしょうか。侮辱の中でへりくだって、敵に対して愛を示し、アブラハムまでもが喜びを見いだした永遠の神である偉大なイエス様に、

心から冠をささげようとするのでしょうか。最初に見たエロワード・ペロネットは、地上での最後の日、こんなことばを残したとされています。「神の神としての高みに栄光あれ。神の人となられた深みに栄光あれ。すべてにおいて十分であられる神に栄光あれ。わたしの霊を御手に委ねます。」と。イエス様の偉大さを知っていた彼は、その偉大さを賛美することをやめませんでした。どんな時もイエス様の偉大さを覚え、イエス様に対して賛美する者として、最初から最後まで走り切りました。これこそ私たちにとってのすばらしい模範です。決して忘れてはいけません。私たちのためにこの世に来られ、十字架にかかられたお方は何でもない些細な存在ではありませんでした。この方は人となられたまことの神様でした。

『わたしはある』であるお方が、私たちの罪の代わりとなって、父なる神様の御怒りを受けて砕かれたのです。いのちであるお方がご自身のいのちを喜んでささげてくださいましたから、今この方を信じる私たちは罪を赦され、もう死を見ることはないという永遠のいのちの希望を持って生きていくことができるようになりました。イエス様が生まれる2000年前、アブラハムはイエス様が来られるその日を見て、大いに喜び楽しみました。イエス様が生まれて2000年たった今、私たちはそのイエス様が実際に来られ、そのイエス様が十字架にかかって罪の救いを成し遂げてくださいましたことを大いに喜ぶことができます。偉大なお方が私たちのために来てくださいました。そんな永遠の『わたしはある』であるお方、すばらしいことをなしてくださったお方に従って、この方を心から愛する者として、今週も喜んで冠をささげながらこの方の栄光のためにも生きていきましょう。